

佳作

## 最後の約束

静岡県 静岡県立清水南高等学校中等部三年 大木 麻衣

「来年こそは一緒に花火をやるう。」

去年の夏、私と父はそう約束した。三年ほど前だろうか。沢山の手持ち花火を祖母に貰った。パチパチと音を立てて色鮮やかに燃える花火はその年の夏を締めくくるのに相応しかった。半分まで火をつけたところで残りは来年に回すことにした。しかし、習い事や父の単身赴任が重なり、なかなか花火をする機会がなかった。だから私たちは約束した。部屋の片隅に立て掛けられた花火が視界に入る。その度に待ち遠しさが高まるのを感じた。

それから半年。息が白くなる季節。凍える寒さだった。が、新年を迎えた街はどこも賑やかだった。単身赴任中の父も静岡に帰ってきて、毎年恒例の新年会に行った。久しぶりに会った従姉、大人たちはお酒を飲んで楽しそうに話している。冷えきっていたはずの私の身体はすっかり温まっていた。こんな日

常が当たり前に続いていくんだと信じていた。

しかし、そんな「当たり前」が簡単に割れてしまうガラスのようなものだったのだと気づくのに時間はかからなかった。突然のことだった。私はいつも通り学校に通い、いつも通り授業を受けていた。ただ一つ、いつも通りでなかったのは、授業中他教科の先生に、

「今すぐ支度をして昇降口に。」

と言われたことだった。駐車場には母の車があり、中に入ると母は泣きながら電話をしていた。相手は警視庁の方らしい。嫌な予想が何度も過りながら会話が終わるのを待った。心臓の音がうるさい。空気が重かった。しばらくして電話が切れ、母は向き直る。

「パパ死んじゃったんだって。」

血の気が引いた。涙も声も出ない。どう反応するべきか分からず沈黙が続いた。ただただ座席に座っているだけの時間。目の前が真っ暗だ。一番に頭に浮かんだのは、あの花火の約束。もう果たされることのない薄っぺらな約束。私は父を「嘘つき」だと思った。それと同時に自分を責めた。

「私をもっと努力をすれば、去年だって一昨年だって花火ができていたのかな。」

約束、それは一見ただの言葉にすぎないのかも知れない。人間一つや二つ果たせなかったもの、破ってしまったものがあるだろう。そして、それに対して後悔を感じていないだろうか。どんなに小さな約束でも必ず果たさなければいけない「責任」がある。私はそれを大切なものを失って気づいた。しかし、それでは遅い。一度失われたものは二度と返ってこないからだ。それは命も信用も同じこと。一度失った信用はどれだけ努力をしても返ってはこない。軽い気持ちで交わした約束も必ず何年、何十年後に自分に響く。約束をすることは各々の権利である。だが、責任を持って最後まで果たす努力をするのは各々の義務であるのだと感じた。